

---

# 雨つぶ

猫田犬次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨つぶ

### 【Nコード】

N4185N

### 【作者名】

猫田犬次郎

### 【あらすじ】

純文系の掌編です。何年も前に書いた、処女作。

## （前書き）

純文系の掌編です。何年も前に書いた、処女作。

## 雨あまつぶ

ここしばらく続く雨は若干弱くなったものの、やむようには思えなかった。自分のいるところは初めから終わりまでずっと雨なのではないか。そんな子供じみた発想さえ頭をよぎる。

雨のにおいのするじつとりとした空気の中で過ごしていると、次第に感覚が鈍ってくる。そして水の中にいるように動きづらく、何をしようという気にもならない。

私は遅く起きて食事もとらず、冷たい床の上で仰向けになってただぼんやりと寝転がっていた。したいこともなく、すべきこともない。ただそこにいるだけの人間だ。

天井に見飽きたので目を閉じ、ごろりと横向きになった。床の冷たさが耳に伝わってきた。耳をすませてみると、雨と車の音が聞こえた。だがそれだけで、何も無い。

目を開けるとベランダの外が見え、灰色の空がどこまでも続いていた。そこからぐつと焦点を近づけてゆき、顔の五十センチほど前にある窓ガラスに合わせた。ガラスには無数の水滴が付いていて、それらは常に少しずつ動いていた。私はその中の一粒に注目した。上の方にあるそれは動いていないようでいて、じりじりと下へ向かっていた。そのうち他の水滴と近づいてきた。そして触れ合うと一つになって重くなり、つつつ、と一気に落ちた。後ろに小さな水滴をいくつも残し、軽くなるとまた緩やかに下り始めた。水滴はそれを二度三度と繰り返しながら降りていった。それが何度目かわからなくなったところ、またつつつ、と落ちたかと思うと窓ガラスの端まで来てしまった。窓枠のふちに溜まった水に溶けてしまい、ずっと見ていた水滴をその中から見分けることは出来なくなった。すると急に、自分が膨大な無の中へ置かれたような気持ちになり、怖くな

った。

その時になってようやく、自分は生きていたのだと気づいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4185n/>

---

雨つぶ

2010年10月8日14時59分発行